

孝明天皇

江蘇工業學院圖書館
御製文集藏書章

平成二年十月五日印刷
平成二年十月十九日発行

孝明天皇御製集

発行所

平京都市左京区岡崎西天王町
安神宮

代表者 小野朗光

印刷所

(株)続群書類従完成会

序

このたび御祭神孝明天皇御鎮座五十年の式年大祭を迎えるにあたり、御聖徳顕揚に関する事業の一として『孝明天皇御製集』を刊行出来まことは誠に慶ばしく存じます。

孝明天皇の治世二十一年間は近代日本の胎動期であり、内外騒然とした誠に難しい時期でありましたが、英明な天皇はよく世の推移を洞察され、明治維新の礎を築かれたのであります。天皇は三十六年の短い御生涯でありましたが、常に国を憂い民を思われ、その御聖徳は誠に宏大無辺でありました。その御聖徳を追慕する国民の願いによって、皇紀二千六百年にあたる昭和十五年十月十九日、平安神宮に奉祀申し上げたのであります。

この御製集につきましては、昭和四十二年孝明天皇百年式年大祭を記念して出版いたしました『孝明天皇紀』に続いて刊行すべく、宮内庁侍従職徳川義寛様をはじめ、関係各位の特別のお計らいにより、昭和四十一年東山御文庫の秋の虫干しの折り、孝明天皇の御製集全てを写真撮影させていただき、当神宮ではこれを底本として故中村一郎先生

の指導を仰ぎ、前森山太郎権宮司・同大河生海禰宜を中心に慎重に準備を進めて参りましたが、昭和五十一年正月六日未明、心ない極左ゲリラによって御本殿が被災するといふ事態に遭遇、復興までの間、暫時中断の止むなきに至りました。

昭和五十四年復興成ると共に、再び準備に着手いたしました。能筆で書かれた万葉仮名の原文の復刻では万人の判読に適さないとして、これを現代仮名にする作業を進めて参りましたが、これは思いの外の難事であり、牛歩の如く遅々とした進捗状態でありました。然し、天皇の御鎮座五十年祭の記念としてその一部でも刊行したいと言う故三條宮司の強い要望により、昭和六十三年から國學院大学の今江廣道教授に編纂をお願いし、平成元年七月宮内庁侍従職より出版の御許可をいただいで、ここにまず『孝明天皇御詠草』『此花祈集』『此花詠集』『此花集』『此花集千首上・下』の御製七千余首を所載した『孝明天皇御製集』を上梓することになった次第であります。

京都は近く平安建都千二百年を迎えようとしています。建都千百年を記念して創建された当神宮も同時に百年の大きな節目を迎えるわけであります。現今、世界の動向は誠に激しく、国も国民も共に斉しく主体性の確立が急務となっております。このような折り、この御製集の刊行は時宜を得たものであり、幕末の大きな変革の嵐の中で、日夜常

に国の安泰と国民の幸福を願われ、世界の平和を念じられた孝明天皇の、その大御心になる御製の数々を拝誦するとき、内外の志篤き人々に必ずや切々たる感銘を与えるものと確信いたします。唯々この秋に熱望されていた故三條宮司のお欣びの姿に接し得ないのは痛惜に堪えません。

本年十月十九日、御祭神孝明天皇御鎮座五十年式年大祭にあたり、この御製集を大前に奉奠、広く人々の拝誦に供し得ますことは、誠に欣快に存ずる次第であります。

茲にこの御製集刊行にあたり、その意のあるところを述べ、併せて関係各位の献身的な御努力と出版についての続群書類従完成会の御協力、掲載写真提供について格別の御配慮をいただきました宇佐神宮並びに陽明文庫に対し、衷心より厚く御礼申し上げます。

平成二年十月吉日

平安神宮宮司代務者
権宮司

小野朗光

凡例

一、本御製集は、原則として宮内廳侍從職所管の京都東山御文庫御所藏にかかる、下記の孝明天皇宸筆本を底本とした。

題名	所收年月	勅封番號
御幼年稽古歌	天保十四年・同十五年	一七九一六
御詠草案	嘉永七年正月～安政二年六月	一七九一五
御詠草案	安政二年七月～同年十二月	一七九一五二
御詠草案	安政三年正月～同年十二月	一七九一五三
御詠草案	安政四年正月～同年六月	一七九一五四
此花集詠千首 上		一七九一七一
此花集詠千首 下		一七九一七二
此花詠集	安政四年八月～同六年十二月	一七九一二一
此花集	萬延元年正月～同年十二月	一七九一三

此花詠集

文久元年正月～同年十二月

一七九一四

此花詠集

文久二年正月～元治元年十二月

一七九一九～二〇

此花祈集

文久三年～元治元年

一七九一一

新造内裏色紙歌・近衛家花宴歌

安政二年

一七九二〇

宇佐宮奉納卷物詠記

元治元年

一七九一九

但し、弘化四年より嘉永七年に到る分は、嘉永七年の内裏炎上に際し焼失したためか、宸筆本が存しないので、飛鳥井家より提出せしめられた雅光・雅久父子拜見の下記のものを「補遺」として収めた。

飛鳥井雅光御詠草拜見寫留

弘化四年～嘉永四年

一六九六～三二

飛鳥井雅久御詠草拜見寫留

嘉永四年～同五年

一六九六～三三

飛鳥井雅久御詠草拜見寫留

嘉永五年～同七年

一六九六～三三

また文久二・三年の分は、別に勅封番號一七九八一の宸筆本が存するが、前掲の一七九九～二二所收分と同内容なので、文字遣いの異同のみを（ ）内にイとして注した。

二、本御製集は、見せ消符（ミ）や勾點（ノ）等を含め、底本を出来るだけ忠實に翻刻する事を旨とし、底本の送り假名や助詞の省略、假名遣いの誤りや、誤字・脱字等と思われるも

のに就いても一切注記しない事を原則とした。

三、但し、次の諸點は底本を改めた。

イ、異體・略體の漢字は、原則として全て正字に改めた。

ロ、萬葉假名は、平假名に改めた。

ハ、句と句の間を一字空けて、送り假名の省略等を判り易くした。

ニ、文字の繰り返し記號（以下、オドリ字という）は、漢字は「々」、平假名は、一字の場合
は「ゝ」、二字以上の場合「く」に統一した。但し底本の漢字のオドリ字が助詞を表
す場合は、その助詞を表す平假名に改めた。

ホ、底本では、歌題に同字が並ぶ時は、その字がオドリ字になる場合が多いが、全て正しい
字を當てた。

四、御製には、ほぼ年代順に一首毎に番號をつけた。但し「飛鳥井雅久御詠草拜見寫留」の嘉
永七年の分は、一七九五年一所收分と同じなので、番號は付けなかった。

五、成稿後、原本校正を行う豫定であったが果たせず、平安神宮御所藏のB6判の寫眞のコピー
を主として使用せざるを得なかった。寫眞では朱と墨の判別が困難なので、その區別は行わ
ず、また細字部分の判讀困難な文字は□にせざるを得なかった。

目次

序……………平安神宮宮司代務者 權宮司 小野 朗 光

〔宸 筆〕

- 一、御幼年稽古歌 天保十四年・同十五年……………三
- 一、御詠草案 嘉永七年正月～安政二年六月……………七七
- 一、御詠草案 安政二年七月～同年十二月……………一二七
- 一、御詠草案 安政三年正月～同年十二月……………二一五
- 一、御詠草案 安政四年正月～同年六月……………三〇一
- 一、此花集詠千首 上……………三四五
- 一、此花集詠千首 下……………四九〇
- 一、此花詠集 安政四年八月～同六年十二月……………五七九
- 一、此花集 萬延元年正月～同年十二月……………六三六
- 一、此花詠集 文久元年正月～同年十二月……………七一〇

一、此花詠集 文久二年正月～元治元年十二月……………七五二

一、此花祈集 文久三年～元治元年……………八二九

一、新造内裏色紙歌・近衛家花宴歌 安政二年……………九一九

一、宇佐宮奉納卷物詠記 元治元年……………九三五

〔補遺〕

一、飛鳥井雅光御詠草拜見寫留 弘化四年～嘉永四年……………九四七

一、飛鳥井雅久御詠草拜見寫留 嘉永四年～同五年……………九七一

一、飛鳥井雅久御詠草拜見寫留 嘉永五年～同七年……………一〇四五

あとがき……………國學院大學教授 今江廣道

(題字 小野朗光)

宸

筆

〔御幼年稽古歌 天保十四年・同十五年〕

〔包紙上書〕
此花

幼年之頃之

稽古詠歌留也、

中には

先帝御點之もののみ」

〔稽〕
藝古歌

百首

春

御幼年稽古歌

立 春

1 今朝みれば 山の氣色も 打かすみ 日かけのとかに 春そ來に覺

霞

2 山々も そらも長閑に 霞みつゝ 庭にもはると むかふ日の影

野 霞

3 春の日に 霞たなひく 山々お のとかになかむ 野への夕暮

鶯

4 春くれば 雪の梢に 里なれて こへしほらしく うくひすそ鳴

竹 鶯

5 庭みれば 春を知てか 吳竹に 聲しほらしく 鶯そなく

松 鶯

6 春のきて いや榮へ行 松か枝に 今朝めつらしく 鶯の聲

残 雪

7 春あさき 草葉に見せて 白雪の まはらに残る 九のへには

梅

8 春風に たへすさそいて 梅の花 いろ香も深き あかすなかめん

梅 始 開

(御製を闕く)

柳

9 吹風に さそわれなひく 青柳の 絲よりかけて 露も置けり

柳 風

10 けふはまた なひくおみれは 長閑なる 風にまかする 青柳のいと

春 草

11 春くれは 雪間お分て もへいつる 村々青き 野へのわかくさ

歸 雁

12 古郷の 越路の花に いそきてや 雲井かすかに かへる雁か音

櫻

13 春かせ 外山のさくら 匂ふなり くもとまかふる 峯のいく本

松 間 櫻 二首

14 春毎に 松の木間に 白たへの くもとまかひて 匂ふ櫻木

15 咲重ね 松の緑も うつもれて 雪の雲かと まかふ櫻木

花

16 吉野山 花のさかりを なかむれは さなからかゝる みねの白たへ

花 如 雪

17 嵐吹 やまへに白く さく花は 木々よりちれる 雪かとそ見

雲 間 花

18 春の日に くも間も白く み吉野の やまの櫻や さかり成らん

藤

19 立かへり 又みてゆかん 松かへに 紫深く かゝるふちなみ